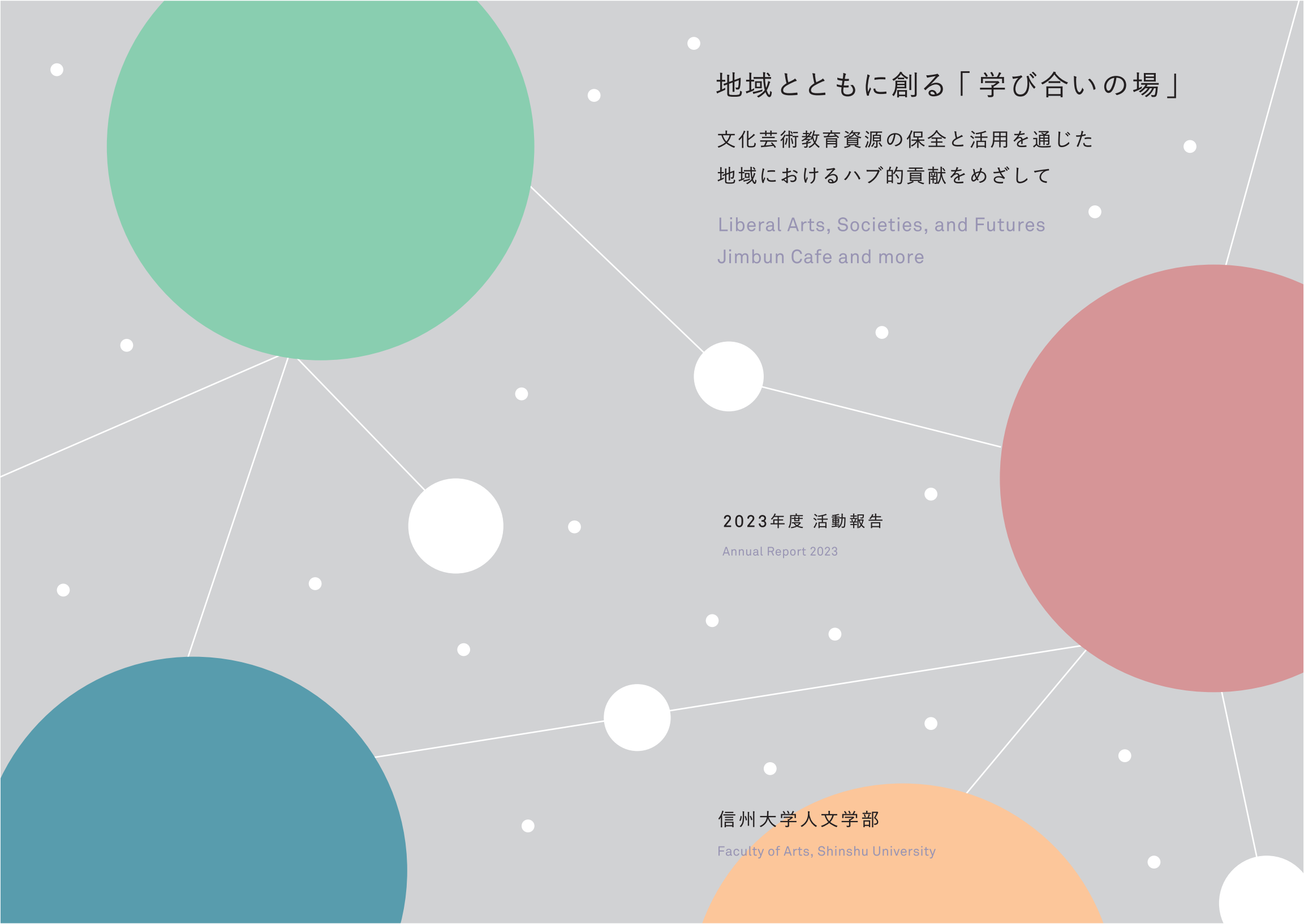




地域とともに創る「学び合いの場」

文化芸術教育資源の保全と活用を通じた
地域におけるハブ的貢献をめざして

Liberal Arts, Societies, and Futures
Jimbun Cafe and more

2023年度 活動報告

Annual Report 2023

信州大学人文学部

Faculty of Arts, Shinshu University

地域とともに創る「学び合いの場」

文化芸術教育資源の保全と活用を通じた
地域におけるハブ的貢献をめざして

—

2023年度 活動報告

—

信州大学人文学部

Liberal Arts, Societies, and Futures
Jimbun Cafe and more

—

Annual Report 2023

—

Faculty of Arts, Shinshu University

はじめに

本プロジェクトは、市民・企業・自治体・高等学校等と連携した、双方向の「学びの場」の創出を目指すものです。信州大学人文学部の教育・研究の成果を発信するにとどまらず、それらを地域社会のメンバーと共有し、相互交流の礎としていきます。「学び合いの場」は、市民や外国人が防災減災について学ぶシンポジウムであったり、高校生と教員・学生がともに語り合う文化サロンであったり、企業人の「学び直し」を提供する場であったりと、様々な形態を取り得ます。それら様々な場での協働を通して、地域の文化・教育のさらなる活性化に寄与するとともに、新たな研究シーズを生み出す仕組みを考えます。また、この取り組みを学外で展開することで、地域のコミュニティやネットワークづくりにも貢献します。

目次

地域とともに創る「学び合いの場」

文化芸術教育資源の保全と活用を通じた地域におけるハブ的貢献をめざして

2023年度 活動報告

集いと語り

- 4 フィリピン山岳地域の先住民族の舞踊、儀礼、
音楽とアニミズム、シャーマニズム
—
 - 6 『目の見えない白鳥さんと、アートを見にいく』上映&トーク
—
 - 8 浅間銀行に集う蚕種製造業の人々
—
 - 10 高大連携哲学演習：
ベジタリアンと命の価値——宮沢賢治『ビジテリアン大祭』を読む
—
 - 12 信州アーツ・クライメート・キャンプ
—
 - 15 旧司祭館の“これまで”と“これから”
-

調査研究

- 19 信州各地に伝来する古典籍・文化財の調査と学知アーカイブ
—
- 21 地域資料の保全活動
—
- 22 謝辞

レクチャー

フィリピン山岳地域の先住民族の舞踊、儀礼、音楽とアニミズム、シャーマニズム



左上：イフガオ地域のモンバキ(シャーマン、左2名)へのインタビュー

右上：イフガオ地域結婚式で踊られる“イーグルダンス” 下：イフガオ地域結婚式のゴンギ演奏者たち

日時・場所 2023年5月10日(オンライン)

参加者 30名

実施者 北村明子(信州大学人文学部教授、舞踊学・身体論)

アジアの土地の信仰や生活文化に根づく芸能についての調査は、その通時性・共時性からも非常に複雑で一筋縄ではいかない。昨年度の中央アジア、ウズベキスタンの調査に続いて、今年度は、東南アジア、フィリピン、ルソン島の山岳地域の儀礼や芸能について焦点を絞り調査を行った。フィリピン北部の山岳地域には、先住民族の生活文化が脈々と継承され、多くの人々がキリスト教を受け入れつつも、同時にアニミズムに基づく信仰や世界観を持ち、自然と共に生き、環境保全にも貢献している。今回調査をしたのはイフガオ地域とカリंगा地域における、日常に溶け込む儀礼やゴンギの演奏、歌い語り(チャント)や踊りである。それらは、現世の人間の身体を通した先祖との対話であり、祈りであり、先住民族共同体の拠り所でもあった。イフガオ地域の結婚式などでは、村人たちによる平板のゴンギ(Gangsa)の演奏や、地域ごとのダンススタイルを共有することで、共同体の性質を確認したりする風習もある。それらはもはや伝統としてのみならず、自然と共存する先住民族の生活の中で、生死にかかわる切実な祈りとしての自然とのコミュニケーションの行為でもあるが、同時に、自然環境の変化と共に消えゆく危うさも孕んでいた。しかし、例えば、カリंगा族の血を引く若い世代のアーティストが、“ゴンギフェスティバル”を主催し、同時に現代アートや音楽、ダンスと融合させていくといったアートイベント推進の動きも見られ、豊かな生活文化の継承と現在を見ることができた。今後も、フィリピンの様々な地域での調査を通し、比較考察を進めていきたい。



左：カリंगा族の若手ゴンギ演奏者 右：イフガオ地域結婚式共同体の村人にもれなく提供される黒豚料理への長蛇の列

『目の見えない白鳥さん、アートを見にいく』

上映&トーク

「学都松本推進事業」(松本市教育委員会)の一環として、『目の見えない白鳥さん、アートを見にいく』(2022年)の上映会を開催しました。同作は全盲の白鳥建二さんがおよそ20年にわたってくりひろげてきた「自由な会話を使ったアート鑑賞」を紹介するドキュメンタリーで、白鳥さんのみならず、個性あふれる登場人物が、美術館の内外で豊かに言葉を交わす様子が捉えられています。ソーシャル・インクルージョンが大きなテーマとなる作品ですが、同時に、今日的なミュージアムのミッションの変化、すなわち研究・保存・展示・教育に加え、交流空間としての機能を重視する方向性や、現代アートにおける関係性の美学の強調とも軌を一にする内容で、極めて示唆に富むものでした。上映後のトークでは、撮影の様子や白鳥さんとの交流について、本作共同監督の三好大輔さんからたっぷりお話をうかがい、映画のメッセージを支える質と背景を知ることができました。

会場にはミュージアム関係者も多く、たいへん嬉しいことに、今後の教育普及活動を考えるヒントになったといった声も聞かれました。また、本イベントは新松本市立博物館での初映画上映となったようです。映画に限らず、今後も広く市民が集う場所・機会として同館が活用されることを願っています。

日時	2023年11月20日17:30-20:30
場所	松本市立博物館 講堂
ゲスト	三好大輔(映画監督)
参加者	52名(大学生22名、一般30名)
企画	金井直(信州大学人文学部教授、美術史)



特別講座

浅間銀行に集う蚕種製造業の人々



講師 原明芳(安曇野市豊科郷土博物館館長)
日時 2023年12月20日18:30-20:00
場所 松本市立博物館 講堂
来場者数 60名
実施協力 金井直(信州大学人文学部教授、美術史)

松門文庫をひらく会との共催で、原明芳安曇野市豊科郷土博物館館長を講師にお招きし、特別講座「浅間銀行に集う蚕種製造業の人々」を開催しました。

そもそも蚕業には、製糸業、養蚕業、蚕種製造業の3種類があり、明治の長野県ではとりわけ蚕種製造業が盛んで、そのシェアは全国の1/2を占めていました。特に知られていたのが松本平(安曇郡+東筑摩郡)の夏秋蚕です。通常の春蚕の場合、養蚕時期が農繁期に重なるのに対し、夏秋蚕は時期をずらして効率よく飼育でき、また、餌になる桑の葉も生育が安定する頃で確保が容易でした。松本には国の研究機関である蚕業試験場(1909年)も置かれます。また、民間でも、鳥羽久吾らによる研究開発が進められ、片倉組と地元の蚕種業者が「大日本一代交配蚕種普及団」(1914年)を設立するなど、産業としての規模も拡大していきました。こうした成長の背景に、蚕種製造業者によって設立された浅間銀行(1897-1910年)もありました。

地域の繁栄のなかで、浅間温泉にも文人墨客を含め多くの人々が訪れ、その魅力も高まっていきます。1919年、私設図書館として松門文庫が建設されるのも、まさにこの流れでした。蚕の富が文化へと織り上げられていったわけです。

当日の講座は大盛況。浅間銀行のあった本郷地区の方や、蚕糸業に関わる方、博物館関係者にも多数ご来場いただき、原先生の熱のこもったお話を堪能しました。

高大連携哲学演習：
ベジタリアンと命の価値
——宮沢賢治『ビジテリアン大祭』を読む



日時 2023年12月3日 13:00-15:00
場所 人文ホール(信州大学人文学部)
参加者 信州大学学生10名長野吉田高校生3名、教員・保護者3名
実施・報告 護山真也(信州大学人文学部教授、インド哲学・仏教学)

長野吉田高校との高大連携哲学演習も5年目を迎えました。今回は、長野吉田高校から教員・保護者をあわせて5名(＋幼児2名)の方々に参加いただき、宮沢賢治の『ビジテリアン大祭』とピーター・シンガーの『動物の権利』を素材として、人間と動物の違い、動物と植物の違い、それらを超えて存在する命の価値について、自由なディスカッションを行いました。

最初に高校生の発表で、「シンガーの議論には共感する部分もあるが、その意見を他者に強要することはできるのか」という問題点が提起されました。続いて、大学1年生3名(梅津、鬼原、田邊)の発表では、『ビジテリアン大祭』のビジテリアンの意見、反ビジテリアンの意見が整理され、個々の論点がまとめられたのち、「動物は感情があると思っていてなお肉を食べている人がいるとすれば、なぜそれが可能なのでしょう?」「自分の家族と猫が死にそうで、一方しか助けられない時、どうするべきでしょうか?」「すべての命は平等に価値があると思うべきなのでしょう?」「自分が可哀想だと思ったら、他者にとっても可哀想だと思ってしまうのはどうしてでしょうか?」という問題提起がされました。

高校生・大学1年生の問題提起を受けて、参加者は3つのグループに分かれて、ディスカッションを行います。世代や立場の違いを越えて、普段考えることのない問題に、自由な意見交換がなされました。「成長の過程を見守ったペットと、そうでない家畜の場合には、愛情の違いがあるのではないか」「心理的な距離の違いが、人間同士、人間と動物、を分けているのではないか」「人間であり、家族であるということは、特別なことではないか」「もしビジテリアンが多数派の国に生まれていたら、やはりビジテリアンを受け入れると思う」「同じビジテリアンを訴えるにしても、シンガーのような論調で伝えるのと、宮沢賢治のように開かれた議論のかたちで伝えるのでは違いがあるかも」など、様々な意見が出てきます。

みなさん、それぞれの考えを深める機会になったようで、なによりでした。宮沢賢治はこの話の終盤で「この世界は恐ろしいまでに真剣な世界なのだ」という言葉を記しています。人間・動物・植物の関係をつきつめていった先に、彼が見ようとしたものは、なにか生命の根源に触れる世界の実相だったのだと思います。今回の企画を通して、私たちもまた、その「真剣な世界」の一端を垣間見ることができたような気がしています。参加者のみなさん、ありがとうございました。

信州アート・クライメート・キャンプ

第1回〈会議〉「信州発、アートとゼロカーボンの明日へ」

開催日：2023年7月4日 場所：信州大学松本キャンパス

第2回〈会議〉「アート×気候危機 ～不可能かもしれないビジョン～」

開催日：2023年10月1日 場所：上田映劇

第3回〈会議〉「地球の今、美術館の明日 ～持続可能な未来をめざして～」

開催日：2023年11月23日 場所：長野県立美術館

第4回〈会議〉「森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし」

開催日：2024年1月20日 場所：「奏の森」

報告：金井直（信州大学人文学部教授、美術史）



第3回〈会議〉より

信州大学人文学部は信州アーツカウンシル（長野県文化振興事業団）と共同で「信州アート・クライメート・キャンプ」を主催・実施しています。「キャンプ」と呼んでいますが、多様な人々との緩やかな集いをイメージしたもので、形態は小規模な交流会から大規模なシンポジウムまでさまざまです。大切なことは、キャンプの経験が醸し出すような人と人、人と環境の親密さ、近しさでしょう。それをもって、気候変動とアートの関わりを語り合い、思考を更新し、可能な行動を発見、実践していきます。そのような活動の一環として、今年度は4回の「会議」（シンポジウム）を開催しました。

第1回〈会議〉は「信州発、アートとゼロカーボンの明日へ」と題して、信州大学松本キャンパスで開催（7月4日）。人文学部の茅野恒秀准教授（環境社会学）の基調講演「脱炭素社会に向けた実践とその考え方」を通して、気候変動の現状と対策、ローカルな実践のポイントを学び、さらに討議を行い、今後の活動について、前提や認識の共有を進めました。

第2回〈会議〉「アート×気候危機 ～不可能かもしれないビジョン～」(10月1日、上田映劇)ではドキュメンタリー映画『グレート・グリーン・ウォール』上映と「サブニュマ」によるアフリカダンス・パフォーマンスに引き続き、長野県在住のアーティストによるアート活動と気候変動をめぐるディスカッションを実施。現状に立ち尽くすことのない、アートのもつポジティブな力をたっぷり感じるひとときでした。

第3回は「地球の今、美術館の明日 ～持続可能な未来をめざして～」と題して、長野県立美術館で開催しました（11月23日）。NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウの塩見有子さんから紹介いただいた世界の美術館やギャラリーの気候危機対策を受けて、いま、長野県の実美術館、美術界から始めるべきことについて、美術館関係者に加え、集ったアーティストや専門家が、大いに語り合いました。

第4回（1月20日）は会場を南信州中川村の「奏の森」に移し、「森で語らう、自分たちの環境・アート・暮らし」と題して、荒れた森を拓き、持続可能なカタチでアートと暮らしが重なる場を創ってきた「奏の森」の皆さんの実践をはじめ、県内各地のグループが活動内容を報告し合う、一種の交流会を、とても和やかな雰囲気のもと、開催しました。

ところで、なぜアートと気候変動アクションを私たちはつないでみているのでしょうか。それにはおよそ3つの理由／視点があります。ひとつはアートの伝達力・発信力です。環境や気候危機をテーマにした作品は、通常の情報発信とは異なるかたちで、心に響くメッセージを人々に届けることができるでしょう。環境についての情報や意識を共有する

大切な手段としてのアートです。第二にアートの独創性があります。アート経験は私たちの発想を柔軟にし、習慣や既存の価値観を見直すきっかけを与えてくれます。環境問題をめぐる、重要な行動変容の契機となる可能性があるということです。第三の視点はアートもまたひとつの産業ないし制度であるという事実です。地上の営みとしてのアートを特別視する必要はありません。つまり、その生産消費の全体を環境側面から捉え直し、脱炭素の取り組みに繋いでいくことは、重要・不可欠な行動なのです。

今年度の活動を通して、私たちは様々な知を得、また、それを分かち合うことができました。来年度は、さらに具体的なアクションを目指して、アーティスト、市民との協働を進めていくことになります。年毎にますます気候危機が実感される難しい状況ではありますが、それでもその条件から、新しいアートのかたちや方法が生まれ出るかもしれません。喫緊の課題も多いでしょう。そのうえ長い挑戦です。だからこそ、アートとともに歩んでいきたい。そう思っています。



第2回〈会議〉より「サブニューマ」のパフォーマンス

クロストーク

旧司祭館の“これまで”と“これから”



日時

2024年2月23日 13:30-15:30

場所

信州大学附属図書館 中央図書館 2Fセミナー室

トーク

遠藤正教(国宝旧開智学校学芸員)、

渋谷豊(信州大学人文学部教授、比較文学)

ディスカッション

大司百花、玉田梨々花、中野多恵、西宮丈樹
(信州大学総合人文社会科学部研究科修士1年)

来場者数

25名



長野県宝松本市旧司祭館は、カトリック松本教会の歴代神父が過ごした住居で、1889年竣工です。現存の西洋館では県内最古と言われています。その歴史を紹介する展覧会「旧司祭館が伝えるもの 一神父たちとその時代―」の関連企画として、展示に携わったみなさんによるトークと意見交換の機会を設けました。

遠藤正教さんからは「カトリック松本教会と旧司祭館」と題して、日本における布教史や松本の歴代神父の活動、建築としての旧司祭館の特徴についてお話いただきました。クレマン神父(松本教会在籍1887-1891年)による司祭館および天主堂建設の経緯、セスラン神父(在籍1901-1928年)による和仏大辞典の作成と中島健蔵との交流、戦中期のライモンド神父(在籍1937-1949年)の苦労、戦後の教会と信州大学生の交流など、いずれの話題も興味深く、地域の歴史をあらためて知り、現在につながる信仰や文化を実感することができました。また、建築史的に、ヴェランダ系コロニアル様式と下見板系コロニアル様式の混交としての日本の洋館の特徴をよく示す旧司祭館というご指摘は、同館の特徴である大きなガラスで被われたヴェランダ部分などを見れば、たいへん説得力のあるもので、建築が文化交流／混交のあり方を具体的に知り、問うための大切な事例となることを、あらためてよく理解することができました。

渋谷豊先生のお話は、明治期から松本を含む日本各地に神父たちを送り出したパリ外国宣教会の歴史を概観したうえで、セスラン神父に特に注目し、日仏文化交流に彼が果たした役割を論じるものでした。詳述されたのはセスラン著『和仏大辞典』(1940年)の特徴で、同書の文献学的起源を辿ると同時に、フランスにおけるその今日的な評価・意義が紹介されました。また、セスランの日本研究者としての側面(日本に関する

論文が複数あります)も指摘され、同氏が日本／松本へのフランス文化移入に貢献したのみならず、フランスへの日本文化移出にも大きな役割を果たしていたことが示されました。お話の最後に、旧司祭館に限らず歴史的建造物・文化財を「窓」として、それを通して過去に行き交ったさまざまな人々の営為を思う心性や想像力を語られました。大切なご指摘であったと思います。

お二人からのお話につづいて、大学院生を交えたディスカッションを行いました。大司百花さんからは旧司祭館がその後の松本の建築に与えた影響について、玉田梨々花さんからは教会施設と松本城の位置関係について、中野多恵さんからは、神父のあいだで受け継がれてきた精神や実践について問いが立てられ、会場のみなさんを交えた意見交換が実現しました。また、西宮丈樹さんからは、司祭館の美しさのみならず、その歴史を理解しつつ、学びの場として活かすことの大切さが指摘されました。

その他にも、博愛的な人間観や異文化交流の歴史性、松本の学都的性格、安曇野の井口喜源治など、論点や話題はさまざまに広がりました。さらに遠藤さんと渋谷先生からは司祭館とともに歩んでこられた信者さんや地域のみなさんの言葉に触れることの大切さが語られ、カトリック松本教会のご協力を得て進められる今後の調査の重要性も再確認されました。

近年の文化観光の流れを受けて、市内・県内でも文化財の利活用がなにかと話題になりますが、今回の集い自体、大切な「利活用」になったという遠藤さんの最後の言葉がとても印象的でした。人文学部としても、博物館・教育委員会そして市民のみなさんとの学び合いを、今後も大切にしていきたいと考えています。



展示

学都松本推進事業 国宝旧開智学校・信州大学人文学部連携企画
旧司祭館が伝えるもの ―神父たちとその時代―

会期 2024年2月15日-3月21日
開館時間 平日：8:45-17:00、土日祝：10:00-17:00
休館日 2月25日、3月12日
会場 信州大学附属図書館 中央図書館1F展示コーナー



今年度、国宝旧開智学校と信州大学人文学部は、県宝松本旧司祭館において、3回の特別展示を開催し、同館の歴史を、人物やそこで育まれた文化を通してふりかえりました。本展では、その内容を踏まえ、さらに関連資料を交えつつ、あらためて旧司祭館の歴史的意義を紹介しました。

信州各地に伝来する古典籍・文化財の調査と学知アーカイブ | 長野県域博物館・自治体所蔵の古典籍調査



信州大学人文学部では、信州の各地に伝来する貴重な古文書や古典籍・文化財の調査ならびに整理・目録化を継続して行っています。これらは、文化財を保存・活用し、また未来へ繋げてゆくための基盤となる、不可欠な活動として位置づけられるものです。これまで、地域の要請にお応えするかたちで、教員がコーディネーターとなり、学

生・大学院生諸君とともに、多様な資料群の調査を継続実施してきました。

今年度も、意欲的な学生・大学院生諸君との充実した調査を行ってきましたが、特筆すべきは、学外からご参加くださる方々が増加したことです。学会やシンポジウムで一緒に研究の方々に、調査のことをお話する機会がありますが、このような意義ある活動に参加してみたいというご希望を戴き、国宝旧開智学校・真田宝物館の調査に、関西や中国方面から、複数の専門家が調査に参加協力くださるようになりました。

国宝旧開智学校の調査では、1700冊余りを数える「柴田文庫」の調査に着手して4年目になります。コロナ禍に翻弄されながらなんとか継続してきましたが、今年度はペースが上がり、ようやく三分の一余りの調査が完了しました。蔵書構成が明らかになりつつもあり、今後、松本藩における学問の実態の一端を明らかにできると期待しています。



実施者 速水香織(信州大学人文学部教授、日本文学)
実施日 国宝旧開智学校：2023年8月8-9日、11月26日、12月9日、2024年1月27-28日、3月3日(参加者のべ30名、うち外部協力者のべ3名)
真田宝物館：8月26-28日(参加者のべ15名、うち外部協力者のべ6名)

信州各地に伝来する古典籍・文化財の調査と学知アーカイブ | 松本市の旧家・松林家所蔵文化財の、 自治体との協議による悉皆調査

古文書や古典籍・文化財は、多くの場合、博物館や大学図書館、また諸資料館などに収蔵されていますが、個人のお宅に、先祖伝来の財産として大切に守られているものも少なくありません。そのひとつ、松本市の旧家・松林家のご当主にご依頼を戴いて開始した、同家所蔵資料の悉皆調査を開始して、今年度で3年目となりました(1年目はコロナ禍により動きを封じられていたため、実際の調査開始からは2年目となります)。

松林家の全面的なご協力をいただきつつ、松本市教育委員会と連携しながら、大学院生有志にも参加してもらうかたちで、調査を進めてきましたが、新型コロナウイルスの位置づけが変わり、調査のペースを上げられるようになった結果、同家ご所蔵の資料は、歴史的に貴重な古文書類に留まらず、地域にとって極めて貴重な郷土資料を多く含むことが明らかになってきました。さらには、他地域との交流を物語る文芸資料も多数所蔵されており、興味は尽きません。今年度末の3月には、田川公民館を会場として、調査の中間報告をさせて戴く予定です(2024年2月現在)。地域に稀有な資料群の存在することが紹介する機会を得られたことを、大変喜ばしく感じています。

しかしながら、本調査においては、所蔵資料の全貌をあきらかにすることを、まずは目標としています。今後も調査を継続しつつ、進捗を発見とをご報告していきたいと考えています。

実施者 速水香織(信州大学人文学部教授、日本文学)

実施日 2023年4月21日、5月16日、6月16日、7月7日、9月1日、10月16日、
11月17日、1月19日(参加者のべ34名、うち外部協力者のべ8名)



地域資料の保全活動

本年度は、年度当初の活動計画に基づき、長野県内の地域資料について保全活動をおこなった。具体的には、①信州資料ネットとの連携による2019年台風15号被災史料の保全活動、②長野県諏訪郡下諏訪町下諏訪宿本陣岩波家古文書の所在確認調査を実施した。

①については、2023年7月20日(人文学部教員1名)、2024年1月24日(人文学部教員1名)が、長野市・長野市立博物館においておこなわれている台風災害の水損資料の保全活動に従事した。吸水ペーパーおよび消毒用アルコール、ビニール手袋、精密ピンセットなどの物品を各種補助金・校費などを加えて購入し、支援物資として提供・使用した。これらの活動については、信州資料ネットのX(旧ツイッター)およびフェイスブックなどで周知されている。

Facebook : <https://www.facebook.com/shinshushiryou>

Twitter : <https://twitter.com/shinshushiryou>

②については、2023年5月29日、下諏訪宿本陣岩波家からの依頼により、戦後ほとんど未確認であった岩波家文書の所在確認調査を実施した。調査には人文学部教員1名・人文学部学生1名、工学部教員1名・院生2名が参加した。調査では、岩波家本陣住宅の現状を確認し、所蔵古文書の現状確認をおこなった。母屋保管分以外に、3箱の古文書を確認、今後の整理・調査方針について打ち合わせをおこなった。

ほかに2024年1月12日には、1月1日に発生した能登半島地震について、史料ネット(神戸大学)主催の史料レスキューに関する意見交換会(オンライン開催: 信州大学人文学部教員1名参加)に参加し、意見交換した。



アルコール消毒・吸水ペーパー使用の様子



冷凍ストッカー保管の被災史料

報告 山本英二(信州大学人文学部教授、日本近世・近代史)

謝辞

地域とともに創る「学び合いの場」実施にあたり、
下記の皆様より多大なご協力を賜りました。
記してお礼申し上げます。
(順不同、敬称略)

国宝旧開智学校

真田宝物館

松門文庫をひらく会

信州アーツカウンシル

長野県長野吉田高等学校

松本市教育委員会

松本市中央図書館

宮田村教育委員会

遠藤正教(国宝旧開智学校学芸員)

小池勝典(宮田村教育委員会文化財担当係長)

千賀康孝(松本市教育政策課)

反町眞里子(コーディネエラ・グリーン・ネットワーク)

原明芳(安曇野市豊科郷土博物館館長)

松林孝和(松林家当主)

三好大輔(映画監督)

山中さゆり(真田宝物館学芸員)

米野みちよ(静岡大学)

2023年度

信州大学人文学部推進プロジェクト

地域とともに創る「学び合いの場」

文化芸術教育資源の保全と活用を通じた地域におけるハブ的貢献をめざして

2023年度 活動報告

デザイン

岡田和奈佳

発行

信州大学人文学部(松本市旭3-1-1)

発行日

2024年3月21日

© Faculty of Arts, Shinshu University 2023